

## 業務評価結果

1 園の基本姿勢について B評価

## ○園の教育・保育理念や目標の理解

<p>教育・保育目標 「知恵と力を出し合って生き生きと遊べる子」          重点目標 「からだづくり こころづくり なかまづくり」</p> <p>平成30年度より施行された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の内容について、改定に当たっての基本的な考え方を共通にし、幼稚園教育要領・保育所保育指針の整合性について学び合った。教育・保育で育みたい資質・能力の明確化、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等、保育の中で計画的に実践し、内容の充実を図っていくことが今後の課題である。今年度の成果としては、地域の人材や保護者との連携を深め、協力関係を築きながら、「子どもの最善の利益」を考え実践してきた。子どもたちの心の豊かさ、たくましい体づくりへの成果、人とかかわる力の向上も見られるようになった。</p>
--

## ○認定こども園としての社会的責任の理解

<p>職員一人一人が、園児の人格を大切に、持ち味を生かした保育、個人差に配慮した保育に心掛けることで、一人一人が安定し、自己発揮する姿が見られた。また、園児や保護者の個人情報について適切に対応し、守秘義務を保持し、信頼関係を崩すことがないように努めることができた。</p> <p>保護者からの要望を真摯に受け止め、園の方針を伝え理解を求めた。また、改善できることは努力して、よりよい園運営に活かすようにした。</p>
--

## ○職員としての心構え

<p>各職員が業務遂行にあたり、分掌・役割を理解し、見通しを持って期日を守って取り組むなど、責任感のある行動が身についてきている。また、職員間の相互の連携が何より大切であることを意識し、協力体制が高まってきている。</p>
---

## 評価項目の達成状況

## 第1章 総則

評価対象	結果	理由
第1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等	B	指導計画の内容に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や、5歳の後半の計画に小学校との接続としてのアプローチカリキュラムの押さえを持ったことで、実践の具体化ができた。成果として子ども自身、自ら考えて行動する力が身についてきている。さらに、幼児理解や遊び・生活の改善等PDC Aサイクルに基づき、子どもの成長を促すとともに、職員の保育力向上につなげていきたい。

<p>第2 教育及び保育の内容並びに子育て支援等に関する全体的な計画等</p>	<p>B</p>	<p>全体的な計画の作成、実施、改善が教育及び保育活動や園運営の中核となることを踏まえ、実践してきた。家庭、地域の実態に即応した保育内容の見直しや、預かり保育や子育て相談等、子育て支援の充実を図ってきた。また、子育ての講話や栄養講座等を行ったことで、保護者支援にもつながった。特別支援における相談を実施したことで、保護者との連携を図ることができ、個に応じた対応が成長につながっている。今年度は職員の体制が整わず、一時保育の実施をすることができなかったことが課題である。14時以降の預かり保育の利用者は多く、就労のみにかかわらず、いろいろな理由で利用している。土曜保育は毎回数名であるが、就労に合わせて利用している。</p>
<p>第3 幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項</p>	<p>B</p>	<p>満3歳未満の園児については、特に健康、安全や発達の確保を十分に図り、満3歳以上の園児については、集団活動の中で、遊びを中心とする園児の主体的な活動を通して、発達や学びを促す経験が得られるよう工夫することができた。</p>

## 第2章 ねらい及び内容並びに配慮事項

<p>第1 乳児期の園児の保育に関するねらい及び内容</p>	<p>C</p>	<p>乳児期の園児の保育は愛情豊かに、応答的に行われるよう、日々の実践において環境構成や保育教諭のかかわり方を研修し、見直すことができたが、教育・保育要領に基づきねらいや内容について共通理解を図っていく必要がある。</p>
<p>第2 満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関するねらい及び内容</p>	<p>C</p>	<p>基本的な運動機能の発達、(自立のための身体的機能、指先の機能、言葉の表出等)乳幼児の生活の安定を図りながら、応答的にかかわる大切さについて、研修を進めてきている。具体的な5領域において、ねらい及び内容について、職員一人一人が学び、実践に活かせるようにしていく必要がある。</p>
<p>第3 満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容</p>	<p>C</p>	<p>3歳児の発達の特徴を踏まえて、個の成長と集団としての活動の充実が図られるように、実践の見直しや、工夫に努めてきている。5領域に沿ったねらい及び内容について、具体的に学び、職員一人一人の保育力を高めていきたい。</p>

第4 教育及び保育の実施に関する配慮事項	B	園児の心身の発達及び活動の取組において、個人差を踏まえて、対応するよう配慮してきている。また、日常の健康状態を把握し、適切な保健的な対応に心掛けてくることができた。
----------------------	---	--

### 第3章 健康及び安全

第1 健康支援	B	園児の生命の保持と健やかな生活の基本を大切に、看護師や栄養士との連携を取り、それぞれの専門性を活かした指導を取り入れてきた。今後も適切な対応を行うことができるよう体制整備や研修を行っていく。
第2 食育の推進	B	健康な生活の基本としての食を営む力の育成に向けて、基礎を培ってきている。保護者への栄養講座を含め、お便りを通して食の大切さを啓発してることができた。園児も意欲を持って食に関わる姿勢が高まってきている。
第3 環境及び衛生管理並びに安全管理	B	施設内外の設備、用具等の衛生管理に努め、安全性や事故防止に努めてきた。職員の衛生知識の向上と対応手順の周知徹底に力を入れていきたい。
第4 災害への備え	B	防火設備、避難経路の安全性が確保されるよう、定期的に安全点検、避難訓練を実施してることができた。緊急時には職員の判断が大切になってくるため、いろいろな状況を想定した訓練を実施していく。

### 第4章 子育ての支援

第1 子育ての支援全般にかかわる事項	B	子育て相談をはじめ、保護者対象の保育体験の場や学期ごとの参観会・懇談会・個人面談等を通して、家庭と連携する機会を持ち、子どもの成長を支えることができた。
第2 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援	B	園全体の体制構築に努め、必要に応じて関係機関との連携、協働を図ってきている。保護者の園児に対するかかわり方が見直された例もある。引き続き保護者支援に努めていきたい。
第3 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援	B	来年度の入園児対象とした子育て支援を計画的に実施することができ、入園希望につなげることができた。

## 2 総合的な評価結果

結果	理 由
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こども園における教育及び保育の基本及び目標等においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や、5歳の後半のアプローチカリキュラムの作成により、職員各々の意識や質の向上につながっているものと受け止められる。</li> <li>・乳幼児期の園児の保育に関するねらい及び内容については、教育要領の改訂から2年の経過しているが、じっくり学び合う機会が少なく、身につけていないことが明らかに捉えられる。</li> <li>・健康安全・食育指導・子育て支援では、職員の共通理解や改善の提案等で園とりの方向性が具体化し、円滑な運営につながっている。今後も研修を重ね一人一人の実践力を高めていきたい。</li> </ul>

## 5 今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取組み
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの成長を促し、保育の質を高めるための研修(保育教諭の資質向上)</li> <li>・教育課程・指導計画の再編成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼保連携型認定こども園教育・保育要領をもとに、各学年での発達に応じたねらい・内容について理解を深め習得していく。</li> <li>・目的や時期・方法など検討し、子どもの発達に応じた生活・遊びの充実を図る。指導計画の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の見直しをし、実践に活かしていく。</li> </ul>

## 6 関係者評価委員の意見

--

浜松学院大学附属愛野こども園 園長 大野 正恵

# 令和元年度浜松学院大学附属愛野こども園学校評価 (自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果)

※ 評価点は、A (十分に成果があった)・B (成果があった)・C (少し成果があった)・D (成果がなかった) の数値で表す。

## 1 園の基本姿勢

評価項目	自己評価結果		学校関係者評価委員会の意見	
	評価点	こども園としての反省と改善策	評価点	学校関係者評価委員会の意見
○園の教育・保育理念や目標の理解 ○認定こども園としての社会的責任の理解 ○職員としての心構え	B	<p>平成30年度から施行された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の内容について、改定に当たっての基本的な考え方を共通にし、幼稚園教育要領・保育所保育指針の整合性について学び合った。教育・保育で育みたい資質・能力の明確化、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等、保育の中で計画的に実践し、内容の充実を図っていくことが今後の課題である。</p> <p>今年度の成果としては、地域の人材や保護者との連携を深め、協力関係を築きながら、「子どもの最善の利益」を考え実践してきた。子どもたちの心の豊かさ、たくましい体づくりへの成果、人とかかわる力の向上も見られるようになった。職員一人一人が、園児の人格を大切に、持ち味を生かした保育、個人差に配慮した保育に心掛けることで、一人一人が安定し、自己発揮する姿が見られた。また、園児や保護者の個人情報について適切に対応し、守秘義務を保持し、信頼関係を崩すことがないように努めることができた。</p> <p>保護者からの要望を真摯に受け止め、園の方針を伝え理解を求めた。また、改善できることは努力して、よりよい園運営に活かすようにした。</p> <p>各職員が業務遂行にあたり、分掌・役割を理解し、見通しを持って期日を守って取り組むなど、責任感のある行動が身についてきている。また、職員間の相互の連携</p>	B	

		が何より大切であることを意識し、協力体制が高まってきている。		
--	--	--------------------------------	--	--

## 2 評価項目の達成状況

評価対象	評価項目	自己評価結果		学校関係者評価委員会の意見	
		評価点	こども園としての反省と改善策	評価点	学校関係者評価委員会の意見
第1章 総則	第1 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本及び目標等	B	指導計画の内容に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や、5歳の後半の計画に小学校との接続としてのアプローチカリキュラムの押さえを持ったことで、実践の具体化ができた。成果として子ども自身、自ら考えて行動する力が身についてきている。さらに、幼児理解や遊び・生活の改善等PDCAサイクルに基づき、子どもの成長を促すとともに、職員の保育力向上につなげていきたい。	A	特別支援を要する子どもの対応の難しさがあるが、職員が丁寧にかかわり、生活を支えている。  子どもの実態を捉えて、指導計画の立案をし、ねらいに基づいた子どもへの指導や活動展開ができています。保育教諭の実践力の向上を感じる。
	第2 教育及び保育の内容並びに子育て支援等に関する全体的な計画等	B	全体的な計画の作成、実施、改善が教育及び保育活動や園運営の中核となることを踏まえ、実践してきた。家庭、地域の実態に即応した保育内容の見直しや、預かり保育や子育て相談等、子育て支援の充実を図ってきた。また、子育ての講話や栄養講座等を行ったことで、保護者支援にもつながった。特別支援における相談を実施したことで、保護者との連携を図ることができ、個に応じた対応が成長につながっている。 今年度は職員の体制が整わず、一時保育の実施をすることができなかったことが課題である。 14時以降の預かり保育の利用者は多く、就労のみにかかわらず、いろいろな理由で利用している。 土曜保育は毎回数名であるが、就労に合わせて利用している。		地域との連携は毎年継続してくることで、定着してきた。園児の体験が成長につながり、地域としてはその手助けができています。高い評価でよい。

	第3 幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項	B	満3歳未満の園児については、特に健康、安全や発達の確保を十分に図り、3歳以上の園児については、集団活動の中で、遊びを中心とする園児の主体的な活動を通して、発達や学びを促す経験が得られるよう工夫することができた。		
第2章 ねらい及び内容並びに配慮事項	第1 乳児期の園児の保育に関するねらい及び内容	C	乳児期の園児の保育は愛情豊かに、応答的に行われるよう、日々の実践において環境構成や保育教諭のかかわり方を研修し、見直すことができたが、教育要領・保育指針に基づきねらいや内容について共通理解を図っていく必要がある。	B	長時間を園で過ごす子どもたちが、安心・安全のもとに生活できるよう配慮されている。園外保育を通して、身体諸機能の発達を促すことができている。  研究保育を実施していることが、保育教諭の実践力につながり、子どもの成長を促している。
	第2 満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関するねらい及び内容	C	基本的な運動機能の発達、(自立のための身体的機能、指先の機能、言葉の表出等) 乳幼児の生活の安定を図りながら、応答的にかかわる大切さについて、研修を進めてきている。具体的な5領域において、ねらい及び内容について、保育教諭一人ひとりが学び、実践に活かせるようにしていく必要がある。		
	第3 3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容	C	3歳児の発達の特徴を踏まえて、個の成長と集団としての活動の充実が図られるように、実践の見直しや、工夫に努めてきている。5領域に沿ったねらい及び内容について、具体的に学び、保育教諭一人ひとりの保育力を高めていきたい。		
	第4 教育及び保育の実施に関する配慮事項	B	園児の心身の発達及び活動の取組において、個人差を踏まえて、対応するよう配慮してきている。また、日常の健康状態を把握し、適切な保健的な対応に心掛けてくることができた。		
第3章 健康及び安全	第1 健康支援	B	園児の生命の保持と健やかな生活の基本を大切に、看護師や栄養士との連携をとり、それぞれの専門性を活かした指導を取り入れてきた。今後も適切な対応を行うことができるよう体制整備や研修を行っていく。	B	園児による畑での栽培活動が食育活動につながっている。保護者への講座も実施でき、より推進がされた。

	第2 食育の推進	B	健康な生活の基本としての食を営む力の育成に向けて、基礎を培ってきている。保護者への栄養講座を含め、お便りを通して食の大切さを啓発してきてくれた。園児も意欲を持って食に関わる姿勢が高まってきている。		安全面における、不審者対応訓練の実施が計画的にされている。行事においては、すべての参加者に名札の着用を依頼していることで、安全な保育実践がされている。
	第3 環境及び衛生管理並びに安全管理	B	施設内外の設備、用具等の衛生管理に努め、安全性や事故防止に努めてきた。職員の衛生知識の向上と対応手順の周知徹底に力を入れていきたい。		
	第4 災害への備え	B	防火設備、避難経路の安全性が確保されるよう、定期的に安全点検、避難訓練を実施してきてくれた。緊急時には職員の判断が大切になってくるため、いろいろな状況を想定した訓練を実施していく。		
第4章 子育ての支援	第1 子育ての支援全般にかかわる事項	B	子育て相談をはじめ、保護者対象の保育体験の場や学期ごとの参観会・懇談会・個人面談等を通して、家庭と連携する機会を持ち、子どもの成長を支えることができた。園全体の体制構築に努め、必要に応じて関係機関との連携、協働を図ってきている。保護者の園児に対する関わり方が見直された例もある。引き続き保護者支援に努めていきたい。 来年度の入園児対象とした子育て支援を計画的に実施することができ、入園希望につなげることができた。	B	子育て相談を目的に沿って実施し、職員に還元されることが望ましい。
	第2 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援	B			
	第3 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援	B			

### 3 総合的な評価結果

自己評価結果		学校関係者評価委員会の意見	
評価点	こども園としての反省と改善策	評価点	学校関係者評価委員会の意見
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>こども園における教育及び保育の基本及び目標等においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」や、5歳後半のアプローチカリキュラムの作成により、職員各々の意識や質の向上につながっているものと受け止められる。</li> <li>乳幼児期の園児の保育に関するねらい及び内容については、教育要領の改訂から2年が経過しているが、じっくり学び合う機会が少なく、身につけていないことが明らかに捉えられる。</li> <li>健康安全・食育指導・子育て支援では、職員の共通理解や改善の提案等で園としての方向性が具体化し、円滑な運営につながっている。今後も研修を重ね一人一人の実践力を高めていきたい。</li> </ul>	B	今後も園内研修を継続し、職員の資質向上を目指していけるとよい。

### 4 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み	学校関係者評価委員会の意見
<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちの成長を促し、保育の質を高めるための研修（保育教諭の資質向上）</li> <li>教育課程・指導計画の再編成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼保連携型認定こども園教育・保育要領をもとに、各学年での発達に応じたねらい・内容について理解を深め習得していく。</li> <li>目的や時期・方法など検討し、子どもの発達に応じた生活・遊びの充実を図る。指導計画の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の見直しをし、実践に活かしていく。</li> </ul>	開園10年目となり、園としての歴史が積み上げられてきた。これまでを土台として、よりよい運営を目指してほしい。

### 5 関係者評価委員の意見

今後さらに、子ども一人ひとりに「生きる力の基礎」が身につけていけるよう、また、園目標の達成を目指して、職員の連携のもと、取り組んでいけるとよい。